

Market Insight 2013

日本人海外旅行市場の動向 最新刊
日本人海外旅行マーケットの構造的な変化とその要因を詳細に解説したレポート。二〇一二年の最新市場動向をカバール。当財団の独自調査を基に、変化の下に働く中・長期的ダイナミズムを明確に解説。日本語版、英語版あり。二〇一三年七月発行。



旅行年報 2013 最新刊

直近一年間の旅行・観光市場にまつわるあらゆる出来事について、数多くのデータ・資料を基に分析。日本人の国内・海外旅行、外国人の訪日旅行、観光産業、国内観光地、観光政策など、さまざまな角度から旅行・観光市場の現状を一望できる一冊。二〇一三年十月発行。



旅行者動向 2013 最新刊

最新の旅行の実態や旅行者の意識に関する全国アンケート調査結果を、当財団独自のさまざまな切り口で分析。グラフや図表を多用して分かりやすく解説。政策立案や事業展開などに幅広く活用できるマーケティングデータ集。二〇一三年十月発行。



観光地経営の視点と実践 最新刊

観光地の持続的発展にとって、今や「観光地を経営する」という地域マネジメントの考え方が重要。本テキストは、既存観光地の現場で日々努力し、活躍されている方々が主な対象。「観光地経営」を「一定の方針（ビジョン）」に基づいて、観光地を構成するさまざまな経営資源、推進主体をマネジメントするための一連の組織的活動」と定義し、八つの視点と十の実践例について、その考え方や展開手法を解説。当財団調査研究専門機関化五〇周年記念事業の一環として発刊。二〇一三年十二月発行（丸善出版）。



※当財団出版物のご注文はホームページからお願ひします。
担当：公益財団法人日本交通公社 観光研究情報室
電話 03-5225-6073 <http://www.jtb.or.jp>

次号予告

●観光は、多様な学問領域とつながりを持った研究分野です。近年は国際化の流れのなかで、世界中の研究者が知見を交換し、積み上げ、新しい複合的な学術分野を創造していくようになってきました。次号では、当財団が実施してきた自主研究の成果等を交えながら、国際的な視野から経済、地域計画、交通運輸、マーケティング、造園学や地理学といった学問領域と観光との関わりについて紹介いたします。さらに海外における観光研究の知見の移入や適用、日本からの発信手法や今後の観光研究の方向性についての提言を試みます。

当財団からのお知らせ

「2013年度シンポジウム・セミナーのスケジュール」

●平成二十五年 観光実践講座

「オンパクに学ぶ、観光まちづくりの理論と実践」

↳ 持続可能な観光地づくりのために(仮)

二〇一四年二月二十日(木) 〇九時～二二時(金)

会場：当財団大会議室(朝日生命大手町ビル17階)

今年度は、二〇一二年に別府市で誕生し、その後、全国約四十カ所で開催されるなど、広がりを見せている「オンパク」に改めて着目します。オンパクの仕掛け人である、般社団法人ジャパンオンパク 鶴田浩一郎氏、野上泰生氏の講義、当財団独自調査の結果を通して、オンパクの総括を試みます。また、鶴田氏、野上氏に加えて、地域でのオンパク実践者、受講者間の意見交換を通して、持続可能な観光地づくりのヒントを学びます。

最新情報詳細については、準備ができ次第、ホームページのインフォメーションでご案内させていただきます。当財団ホームページ URL: <http://www.jtb.or.jp>

「研究員コラムの紹介」(二〇一三年九月～二〇一三年十一月)

行く先々で見て触れて、そして地元の人たちと語り、感じたこと。世相のなかに見た観光の未来像など、各研究員が独自の経験と視点を基にして、ホットな雑感を綴ります。当財団ホームページ「研究員コラム」に掲載した三カ月分をご紹介します。

- 198 一人でも独りじゃない入旅 (久保田美穂子)
- 199 自然ガイドと歩く尾瀬 (中野文彦)
- 200 観光分野の国際協力を考える (石黒佑介)
- 201 安心・安全・快適な宿泊のための情報提供とは? (柿島あかね)
- 202 FITマーケットの可能性 (塩谷英生)

当財団ホームページURL <http://www.jtb.or.jp> 研究員コラム一覧で検索

編集後記

◆当財団は九六三年(昭和三十八年)に旅行・観光分野における調査研究専門機関となり、それから十三年後の一九七六年(昭和五十年)に機関誌「観光文化」を創刊しました。三十八年の時を経て、この220号が五〇周年記念号となります。

◆目まぐるしく変化する世界で日本が置かれた経済的・社会的な環境のなか旅行・観光分野という切り口で特集テーマを取り上げ、各界の皆様からのご寄稿や財団研究員の原稿等を掲載して発行してきました。二〇一二年十月発行の215号以降は、当財団が調査研究活動として取り組んでいる研究テーマから、研究員が特集を企画して誌面を作り上げてきています。

◆二〇一二年四月に公益財団法人に移行して、理論と実践とのバランスを保ちながら調査研究活動を通じて社会に貢献することを目指しています。今号へのご寄稿者の皆様の熱いメッセージから、当財団活動への期待が高いことを改めて知ることができました。同時に、当財団からの発信機能としての役割の重要性をも認識する機会となりました。

◆当財団の研究員が多様なカウンターパートの方々や協働し、あるいは自主的に研究して得られる経験や知見に基づいて考察を進めていきます。それらを誌面上で展開し広く発信していくこと、そして世に問うていくことがこれからも小誌の使命です。今後とも「観光文化」のコンテンツにご期待いただき、「愛読のほっとろしくお願ひいたします。」 (片桐)

観光文化編集室メールアドレス: kankouunka@jtb.or.jp